

哺乳類WG 5箇年計画（2021～2025年度）

赤谷プロジェクトでは2019年度に「赤谷の森・基本構想2020」を策定し、それを基に今後5年間の基本方針・達成すべき目標を定める。

・2020年度哺乳類WGの主な内容・議題・進捗状況

- ①ニホンジカを低密度に維持するためのニホンジカの摂食状況の指標および現状評価方法の検討
- ②ライトセンサス調査の実施
- ③利根沼田猟友会・新治支部との連携方法の検討
（意見交換会の開催、低密度管理メニューの検討等）
- ④三国山の花畑の調査・対策検討
- ⑤次年度以降の体制検討

1. 哺乳類WGの目的

赤谷の森は、ほ乳類の生息環境として比較的良好な状態で保たれていると考えられ、この状況を今後も維持・向上させていく必要がある。このため、「赤谷の森」の生物多様性維持・向上のためのモニタリングのほか、哺乳類（特にコウモリ）を活用した自然林回復過程の評価方法について検討を行う。

一方で、今後懸念されるニホンジカ、外来種（アライグマ等）の分布拡大による生態系攪乱などの危機への対応が求められている。この対応にあたっては、プロジェクト関係者だけでなく、地域住民・町・県との連携と、生息環境保全、個体数管理、被害防除対策を有機的に結びつけ、解決する必要がある。このため、モニタリングに基づく赤谷の森における哺乳類の現状および課題を適切に発信していくとともに、今後特に大きな影響が懸念されるニホンジカについては、捕獲を含めた対策を検討し、関係者と連携した実行体制づくりを進めていくこととする。

2. 5年間の活動の内容

2. 1 赤谷の森の哺乳類の出現状況の把握

51 地点に設置されたセンサーカメラを使用し、赤谷の森に出現するその年中・大型哺乳類の出現状況や出現頻度の把握するモニタリング調査を継続し、過去の出現状況と比較し、生息状況や行動パターン、個体群の増減の推定を行う。標高別の出現やエリア別の出現、里山に近いエリアの出現に注目して出現状況を把握する。特に、ニホンジカ、ツキノワグマ、外来種等については、みなかみ町において農作物への被害やツキノワグマとの接触事故なども発生しているため、今後の対策を検討する資料を得ることとする。出現の日時、出現場所、性別などを区別し、みなかみ町、群馬県における捕獲頭数などとも比較しながらより詳細に解析を行うこととする。

2. 2 伐採地に出現する哺乳類の把握

・241 た1 林小班（エリア2）の植生復元試験地

2008年にスギの人工林を漸伐し20m×200m、40m×200m幅の伐採し、植生の復元状況をモニタリングしている。また、復元状況に応じた哺乳類の出現状況を10箇所のセンサーカメラで観測している。令和2（2021）年度に10年目の植生モニタリング調査が実施されるため、合わせて10年の哺乳類の出現状況を解析し、評価を行いモニタリング調査の継続の必要性を判断するものとする。

・247 い1、248 れ1 林小班（エリア5）分収林

1ha以上の伐採地を創出した場合に二ホンジカによる出現状況を把握するため、2017年に6箇所のセンサーカメラを設置して出現状況を把握している。低密度下における伐採地創出後の出現状況を把握するまでとする。

・231 ろ、230 ろ2 林小班（エリア1）イヌワシの餌場創出試験地

イヌワシの餌場創出試験地の設置に伴う伐採は、今後も定期的にも実施される予定である。ここでは、餌動物であるノウサギやヤマドリ出現状況を把握するために第1次試験地（6箇所）、第2次試験地（5箇所）に設置したセンサーカメラでモニタリング調査を実施している。伐採に伴う二ホンジカの出現状況も合わせて把握する。観測期間は、試験地がイヌワシの餌場として機能するまでとする。2か所の試験地で出現パターンが明らかになった場合試験地が増えても追加しない。

2. 2 二ホンジカの低密度管理のための対応

2. 2. 1 二ホンジカの初期出現状況把握のための広域調査

二ホンジカの植生への影響を把握するため、センサーカメラを設置した地点で、①階層別摂食状況調査（2.82m円形プロット）、簡易チェックシート（半径10m）による調査を行い、初期の二ホンジカによる摂食状況や植生への影響を定性的に把握している。2020年の調査から姉山付近No49で不嗜好性植物の優占などが把握された。今後も継続してモニタリングを行うとともに、いくつかの箇所において専門家による不嗜好性種群の把握を行う。

2. 2. 2 二ホンジカの初期出現状況把握のための保全上の重点地域調査

10年以上にわたるモニタリング調査の結果、赤谷の森に生息する二ホンジカの頭数は増加傾向にあり、メスや仔の出現も確認されていることからエリア内で繁殖している可能性も示唆されている。林床植生や伐採地における摂食状況調査、捕獲試験からは、二ホンジカの密度は低く、警戒心が強いことから侵入初期段階であると考えられてきたが、エリア全域に出現が広がっていることや標高の高い三国峠のニッコウキスゲ群落、南ヶ谷湿地など脆弱な植物群落への影響も確認されるようになってきた。影響把握するための調査を実施するとともに、防鹿柵の設置など対策を検討し実施する。

2. 2. 3 低密度化におけるニホンジカ捕獲試験

平成 27 (2015) 年度から低密度化におけるニホンジカ捕獲試験の準備のために鉍塩による誘引状況を把握したところ誘引効果が検出されたため、平成 30 (2018) 年度から林内設置型囲い罠 (1 機)、箱罠 (1 機)、くくり罠 (2 か所に 4~6 機) による捕獲試験を開始した。令和 2 (2020) 年度は、5 箇所でくくり罠を設置して試験を行った。この中で、手法や設置箇所など課題も多く検証され、引き続き低密度化のニホンジカの捕獲に向けた技術の確立を目指して捕獲試験を継続する。また、2019 年度からみなかみ全域においてセンサーカメラによる哺乳類、特にニホンジカの出現状況の把握を行っている。合わせて出現頻度の高かった藤原上ノ原における捕獲試験を実施した。より広域な視点でのニホンジカの低密管理に向けてみなかみ町での捕獲試験の情報も共有しつつ実施する。

2. 2. 4 ニホンジカの管理計画の策定

ニホンジカを低密度の状態でも管理するため、①低密度下でも有効な捕獲手法の検討、②管理計画を策定し、管理体制づくり (ワイルドライフマネージャーの育成、配置も含む) を行う必要がある。管理計画・体制づくりは、みなかみ町、群馬県、猟友会等の関係主体と協力し実施していくこととする。ニホンジカの管理計画は、次期赤谷の森 管理経営計画書に反映することとする。哺乳類 WG では 2013 年度「ニホンジカ管理のための評価項目、指標、調査方法」を作成した。その後 2015 年度版が策定され、現在 2020 年度版を作成中である。ニホンジカの管理計画は、「赤谷の森基本構想 2020」、「ニホンジカ管理のための評価項目、指標、調査方法 2020 年度版」に捕獲試験や GPS によるニホンジカ行動把握調査など新規の調査方法、群馬県、みなかみ町、猟友会との連携なども加えて改訂し作成するものとする。

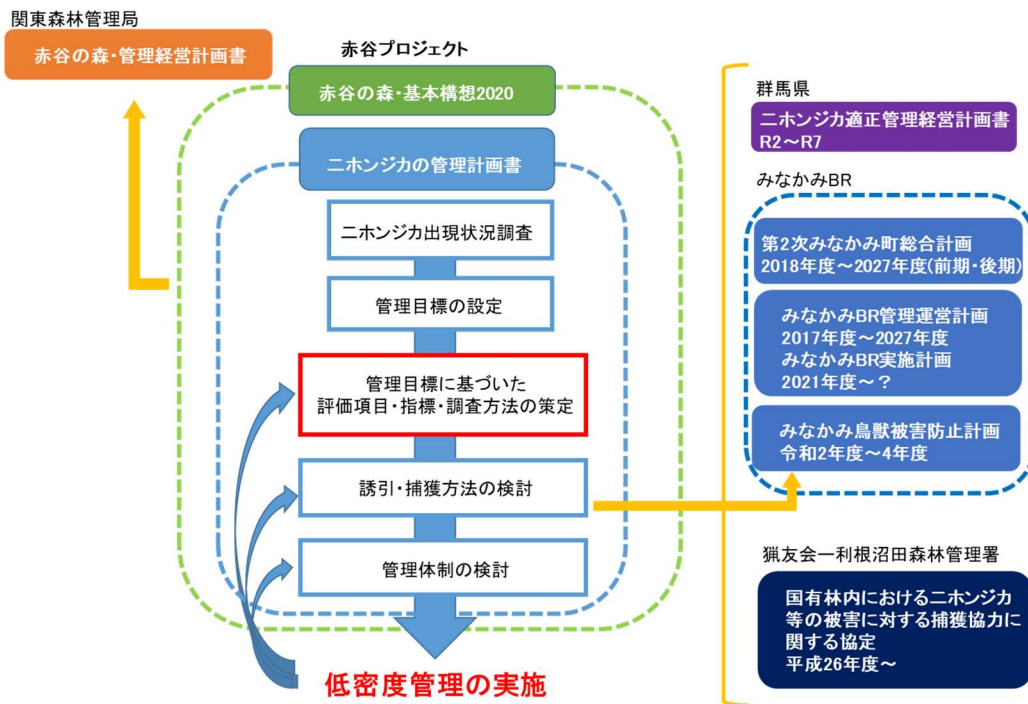


図1 ニホンジカの低密度管理のための体制

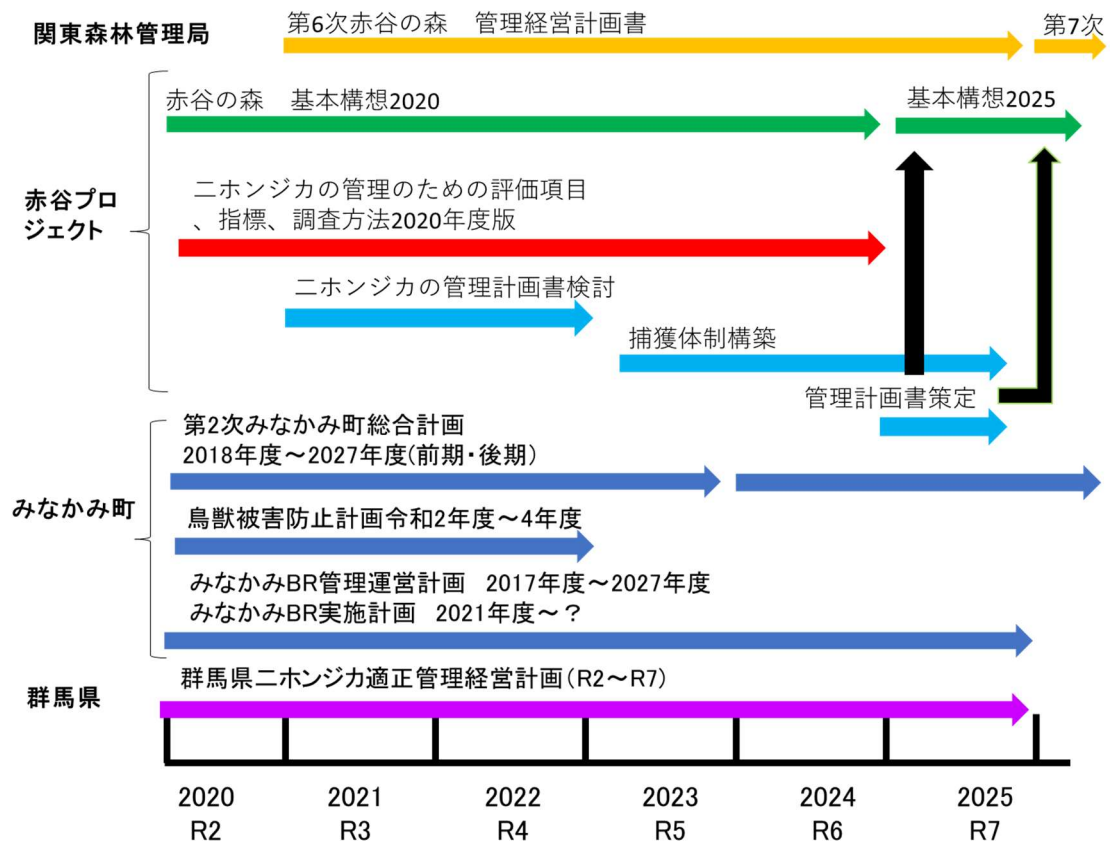


図2 ニホンジカの低密度管理のための管理計画書作成スケジュール

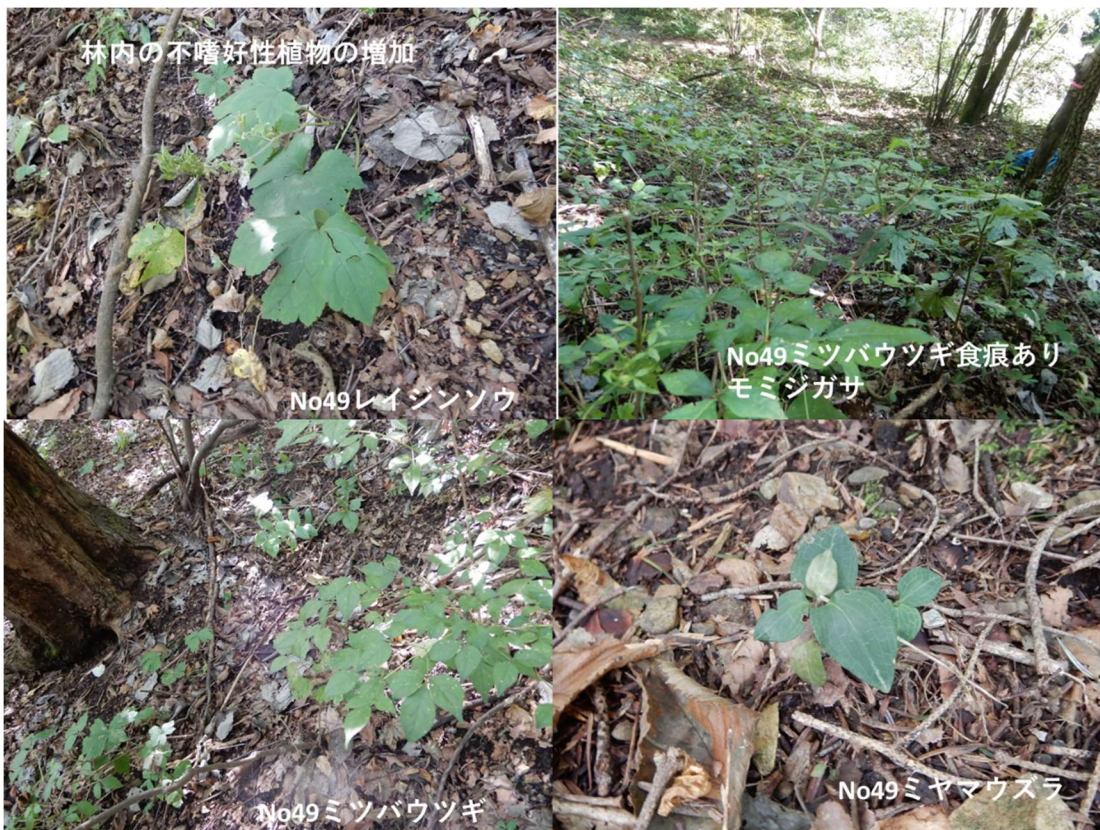


写真1 2020年10月の赤谷の森の林内の不嗜好性植物種



写真2 伐採地の不嗜好性植物の例